OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	松山先生の遺訓
Author(s)	小松, 熊之助
Citation	懐徳. 1927, 6, p. 111-112
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88775
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

下さつた和光同塵的な御態度は小生に取つて頗有難き賜である、世間動もすると『字句なんかどつかで聞け俺は道を説くんじや』といふ聲があるやうである、善く行けば誠に結構であらうが、まづく行くと出鱈目の矛盾盡しで濟むことになる、道は聞かなくつたつて宇宙に滿ちとる。之を聞き見る手段が種々ある內で、讀書はその一つの方法である、聽講話も一つの方法である。小生は前者を安全牽の多い方、後者を少い方と見る、どうも出鱈目の矛盾盡しに終る處が多いと思ふ、而して讀書をするがためには何分讀書力がなければ出來ない、讀書力を付けて下さる先生は其恩大なりといふべきである。先生の鄕黨第十的教育が小生を益する所多かつた事は前已に書いたが今一度書かなくては氣が濟まぬから再記する、言ふ迄もなく、此は道を見る手段中最上なものである。

松山先生の遺訓

小松熊之助

ねもごろにさづけたまひしみをしへを
たふとみいかしみいやまひまつる

此は先生の葬を送るときの感想なり、而して其『ミヲシヘ』の數多き中にて最小生の印象深きものは『正義を好むの情と不義を惡むの情とは同一に非ず、前者は完全なれども後者は無缺とは云ひ難し』てふ御教訓なり、此二つの情は兎角混同され易く、動もすれば石を玉の如く珍重することを免れ難し、殊に修養の足らぬ小生輩にありては此弊最多く自ら苦しみ他を怒らせ、不

幸の種蒔き低止する所なし、痴愚の骨頂と云ふべし、事上磨練未だ其効なく、先生の遺訓に唱和するの資格無きを恥づ、先生の御教訓は猶連續す、『されど此惡むの情は好むの情を助成するに力あり、必しも絶滅するを要せず、只二者が全一物に非ざることを知得するを要するのみ』、と先生の惡まざるや盡せりと云ふべし、いやはひまつる。

松山先生と私

酒井全太郎

私の先生から受けた教訓は、單に定日講義の講筵に列して、それぞれの經書の講義を承つたことより他には特別に取立て、記す程の關係や教訓はないのである。

しかるに或年の正月に受けた所の教訓は未だに記憶して居る、否私の世を終る迄でも忘れられないであらう。

それは丁度一月元旦のことであつた、私は神位を拜しに懷德堂へ行つたのであつた、其時丁度先生も他の二三の方々と樓上に居られたので、種々の御話やら御教訓なりを承つたのである。その折私は無遠慮に斯樣に申上げた、私の先生を知つた時卽ち初めてお目にかゝつたのは丁度この懷德堂の開講の當初であつた、その時の御講義は何であつたか記憶せないであるが、その後私は故ありて他の方面のものを習ふために中途で退學したのである、しかるにその方も業了へたので、又講筵に列することにしたが、二三度